戦争前夜の俳句に出会う

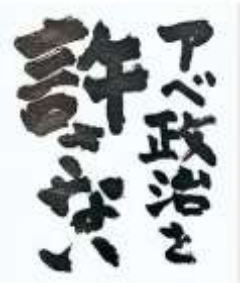
狩場台　朝田菊緒（2026･5･18）

　私あてに送られてくる詩と俳句の季刊誌今春号にぎくりとさせられる作品があった。私は特別に俳句に親しむわけでも同人でもなく、ただ好意に甘えて私信として受け取るだけだが、その作品をあえて公開したいと思う。
それは**「戦争前夜内閣」**として列挙された中のひとつ。

街行くはやがてなくなる腕と脚

　たちまち連想したのが学徒出陣の実写フィルムだった。敗戦押し迫った1943年、東条英機の演説の後、銃剣をかついで明治神宮から繰り出した行進で、たしか足はゲートルで巻かれ、ザックザックと足音までよみがえるようだ。
　ならば、それは「もしか」ではなく、さっそうと今日のわが街をゆく群像も、たちまち腕と脚を失う日が近いと警告するきわめて肉感的でシンプルなメッセージではないか。
　次に思い出したのが**「戦争が廊下の奥に立ってゐた」**の句である。日常生活が戦時体制の歯車にすっぽりからめとられる不気味さ。しのびよる戦争の気配を知ってからではもう遅かった。季語もない自由な表現を求めた新興俳句運動にかかわり戦時弾圧を受けた一人でもある渡辺白泉の作である。これは歴史的な記憶として多くの人が知っているだろう。

　俳句が庶民の思いを率直に伝える有効な手段であることに変わりはない。映像、音声などいろいろ情報手段が変わり、昨今のネット上はビジネスとしてのデマや誹謗中傷があふれている。とはいえ、強烈なひと言は力をもちうる。戦争体験を背負った俳人金子兜太の揮毫による「アベ政治を許さない」は集団的安全保障をめぐって揺れたデモのプラカードになった。そして最近の夜のデモには希望の合図のように光も登場した。



　「戦争前夜内閣」の作品は京都を中心にしたごく少数による同人誌「左庭」に収められていた。作者は山口県在住の江里昭彦氏。彼は歴史ある「京大俳句」の最後の

編集者であり、西東三鬼らの新興俳句に詳しく、オウム真理教事件などにもアンテナを張りめぐらせていた。私が京都在住の折、たまたま仕事で知り合った人で長らく会っていないが、最近の世の悪い流れに黙っていられない思いを強めたらしい。

「戦争前夜内閣」に次のような句もある。

ペンライトなどを手にスタンディングデモに参加する市民ら＝兵庫県西宮市
朝日新聞より

断崖へ「議長i 議長i」と駈けてゆく

潮の底さすらう声は「お母さん」

★ついでに最近の選挙で「ママ戦争止めてくるわ」のひとことがネット上で話題を呼んだことも忘れないでおきたい。芸術であろうとなかろうと、勇気あるメッセージが独り歩きするのを歓迎したい。